

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2021年9月6日

文責：JUN

コロナ第五波における子どもの学びは？

1 苦慮する「第五波」への対策

私たちが、コロナ禍への対策で最初に大きな戸惑いを感じたのは、昨年の3～4月だった。あれから1年半を経過した今、パンデミックが収まるどころか、感染力の強いデルタ株による第五波の脅威にさらされている。

第四波までは、比較的子どもは感染しにくい感じだった。ところが、デルタ株に切り替わると、子どもが感染する事例が次々と生まれ始めた。第五波が拡大したのが夏休み中だったため、この状況は2学期の始まりを控える教師にとって大きな不安感を引き起こした。そして、学校が始まると、その不安感は的中し、全国各地の学校で子どもの感染事例が発生し、休校になる学校も出始めた。

そういう状況に対する学校の対策は、子どもの机と机を離すとか、向き合って話し合うグループは当面の間しないといったことすむことではなく、子どもを半分半分当校させる「分散登校」を行うとか、授業を午前中だけにするとかいう方策をとることとなった。それは、子どもにとっては学校に登校しない時間が増えるわけで、それに対しては、オンライン授業が検討され、実施に移されることとなった。

子どもの命・健康は何よりも大切なことである。だから、とにかく今は感染症対策を厳密に行わなければならない。今、全国の教師たちは、皆、そう自覚し、自らも感染するかもしれない危険に向き合いながらも、子どもを感染させないために精いっぱい取り組んでいる。

しかし、そのように努めながらも、心の中でなんともやるせない思いを抱いているのも事実ではないだろうか。それは、教師の本分は、子どもの学びと育ちに努めることだからである。感染症対策だけでなく、本来なら、子どもの学びの深まりのために、子どもの豊かな成長のために、教師としての力を発揮したいのだ。それを押しとどめなければならない、だからやるせないのだ。

ただ、私は、大変な思いをしている教師の皆さんには酷なようだけれど、そのやるせなさをやるせなさで終わらせるのではなく、感染症対策に万全を期しつつ、それでいて、子どもの学びと育ちのためにできることはないかと考えてもらいたいと思っている。今、皆さんの目の前にいる子どもにとって、今の学年は人生に一度しかないのだから。来年もう一度やり直すことはできないのだから。もちろん、十分なことはできなことはわかっている。十分でなくてもよいのだ。学びと育ちにとってプラスになることをできる範囲で実施する、その思いを忘れないでもらいたい、そう思っている。

2 今こそ、1人1台端末を生かすとき

今、多くの学校が取り組んでいることの一つに「オンライン授業」がある。登校せず家庭に留まっている子どもの学習を保障するために行うものである。無理に登校しなくてもある程度の学習ができることから、今の状況を考えれば、この方策をとらない手はない。もちろん Wi-Fi 環境が不十分な家庭はあるし、昼間は子どもだけになる家庭もある。遠く離れた所にいる子どもの細かい状況はつかめない。だからそれは登校して行う「対面授業」とは比較にならないものでしかない。それでも、今はそれしか方策はないのだから、少しでもよいものにする工夫を凝らしながら取り組んでいるのである。

ただ、私が、「今こそ、1人1台端末を生かすとき」と言うのは、家庭と学校を結ぶ「オンライン授業」のことではない。そうではなく、学校の授業におけるコンピュータ活用を促進すべきだということなのだ。

2学期の開始に当たり、昨年度の4月のような全国一律の休校といった措置は採られなかった。それは子どもの学びを滞らせてはならないと考えられているからである。だとしたら、家庭に向けて行う「オンライン授業」をどうするかということもあるけれど、それ以上に、学校における学びを少しでもよいものにしなければならない。

しかし、体を近づけて、考えと考えを擦り合わせる学び方は、しばらく見合わせなければならぬだろう。そうすると、教師の指導が、一方的に説明し黙々と子どもにやらせる「悪しき一斉指導型」になる危険性が高くなる。そして、子どもの学びは一人ひとりの孤学になってしまい、常に自分一人の思考という狭い枠の中の閉じ込められてしまうから、わからないことはわからないままになり、学ぶ意欲が減退することになる。

この状態を、コロナ感染の危険を伴わない形で克服するにはどうすればよいのだろうか。そう考えたとき浮上するのが1人1台端末の活用なのである。

すべての子どもが端末を使うのだから、子どもが向き合っているのはコンピュータ機器ということになる。けれども、互いの考えを共有する機能を使えば、そのコンピュータ機器の向こうに仲間がいることになる。もちろんその仲間たちは皆、それぞれに考えているのだから、そこで、仲間の考えとの学び合いを行うことができる、もちろん、子どもが向き合っているのは機器なのだからそこにコロナ感染の直接的危険はない。

この、1人1台端末と「学び合う学び」の往還ということについては、拙著『続・「対話的学び」をつくる』（ぎょうせい）で詳述したとおりであるが、第五波のこの状況下では、「学び合い」を実現し、学びの深まりをつくり出すにはこの方法しかないのではないだろうか。

今こそ、コンピュータを活用する学びを「学び合う学び」として行えるようにすることである。GIGAスクール構想として端末が配備されたからそうするというのではなく、コロナ第五波における子どもの学び保障のために、積極的に行うべきである。

こうして、学校における1人1台端末による授業が普通に行えるようになったら、つまり、コ

ンピュータが文房具の一つとして自然に活用できるようになったら、家庭と学校を結ぶ「オンライン授業」も、教師と子どもとはもちろん、子どもと子どもを結ぶ双方向性のある学び方にするには、それほど難しいものではなくなるように思われる。「分散登校」をしている学校において、登校している子どもと家庭にいる子ども双方が同じ学びができるようにと、「対面」と「オンライン」のハイブリッド型を実施しているところがある。その時、学校にいる子どもと家庭にいる子どもが学び合うグループ学習を組むこともできるにちがいない。

このように考えていくと、家庭と結んで行う「オンライン授業」は、学校におけるコンピュータ活用経験の量と質が伴うことによってより有効なものになっていくということがわかってくる。そして、それは、4月以降、配備された1人1台端末の活用について、どういう研修と実践を積んできたかによるということになる。もし、そのための研修が十分にできていなければ、今こそ、短期集中的に研修を行うべきである。

とは言っても、前述したように、「オンライン授業」は、直に対面して行う学び合いほどの学びには行き着かない。でも、それでよいのだ、孤学にしなないのだから。そして、その「オンライン授業」の不十分さが直接かかわり合っ取り組む「学び合い」のよさと大切さに気づかせてくれるのだから。そうなれば、コロナ禍が収まってきたとき、つながり合っ学ぶ営みを一気に爆発させるにちがいない。

今、私たちは、人生にとって、学びにとって、何が大切なのか、なくてはならないものは何なのか、そのことに対する認識を深める大事な機会に向き合っているのではないだろうか。

3 教師は、これまで以上に一人ひとりに心を砕かなければ

机をすべて前向きに離して並べ、ペアもグループもしない、そういう学び方になれば、当然、子どもと子どもは分断されることになる。

分断されれば、子どもの中に生まれる学びの事実は、優れたものも、間違いも、わからなさも、そのほとんどが一人ひとりの中に埋もれてしまうことになる。こうして子どもの学びは脆弱になり、学力格差が大きくなり、学びへの意欲は次第に失われていく。

教師なら、子どもたちがそのようになることを黙って見ていることなどできはしない。しかし、感染症の恐怖が目の前に現れ、厳密な感染症対策を求められたとき、子どもの学びに対するまっとうな感覚が麻痺してしまうことになる。そして、授業が「悪しき一斉指導型」に雪崩を打って落ち込んでいく。

そうならないために忘れてはならないこと、それは、とにかく、子ども一人ひとりを見つめることだ。一人ひとりの内にあるものを慮ることだ。「悪しき一斉指導型」になるということは、子ども一人ひとりに対応せず、子どもたちを十把一からげにして指導することなのだから、そうならないために必要なのは、個を見つめる「まなざし」を大切にすることである。

では、感染症対策下でどのようにして個を見つめればよいのだろうか。

教育にマニュアルはない。だから、こうすればよいという方策を並べるわけにはいかない。けれども、具体的に考えなければ実際に行うことなどできるわけがない。そう考えて、私が大事だと思うことを述べてみようと思う。

前向き机並びで一人ずつ取り組ませる授業をしている状態で、一人ひとりの学びの状況をとらえるには、子どもがそれを表出する手立てをとることだ。他者とかかわらないで表出できること、それは「書く」ことだ。ノートに書かせる、プリントや紙片やカードに書かせる、タブレットに書き入れさせる、そういう場を時間内に複数回入れることだ。

とは言っても、書かせるだけでは意味がない。それを教師が読むこと、読んで一人ひとりに生まれているものをとらえること、そこが大切なところだ。だとすると、子どもが書き始めるやいなや、神経を集中させて一人ひとりが書いていることを見て回らなければならない。短い時間ですべての子どもの状態をとらえなければならない。それには、どういうことが書かれるか、どういうわからなさが生まれるかといったことを、個々の子どもを想定して心積もりをしておくことが必要になる。

書く作業を終了させた後どうするかも極めて大切である。当然のことだが、書くことにより生まれた子どもの考えを取り上げて学びを生みだすようにすべきである。その際、すべての子どもの学びを保障するためもっとも大切なことは、できた子ども、わかっている子どもの正解を発表させるのではなく、どうしてよいか困っている子どもの困り感、わからないこと、間違っていることから学びを始めることである。そうしないと、そういう状態の子どもの学びを生みだすことも深めることもできないからである。

もちろん、困り感や間違いを取り上げれば、そこから深い学びにもっていく教師の組み立て力がなんとしても必要になる。それは、子どもの状態にお構いなしに、教師の予定したことを予定の順に教える教え方ではできないことである。子どもの事実から出発して学びを組み立てることは難しい。しかし、その難しさを厭わない、その志がなければ、一人ひとりの学びに対応することはできないのだから、苦勞を覚悟して取り組むことである。

「書く」という行為は、「話す」こととは異なり、すべての子どもに一斉に行わせることができる。それだけに、一人ひとりをとらえるために有益である。「ふり返り」も書くことの一方方法である。大切にしたい。しかし、「ふり返り」だけでは、子どもの事実をリアルタイムにとらえることは難しい。やはり、授業時間内で何度も書かせる場を設ける必要がある。

そしてもう一つ。子どもが書いたものに返事なりコメントなりを書いてやってほしい。「一斉指導型」になると、一人ひとりの子どもとの双方向性が失われがちになる。しかし、子どもの書いたものに教師が言葉を返すようにすれば、それは、一人ひとりとの双方向性になる。

ここで述べたことは、1例である。コロナ第五波下においても、一人ひとりの学びを大切にする教育は可能である。それは教師次第なのだ。

子どもたちにとって、自分たちの先生がどういう授業をしてくれるか、どういう対応をしてくれるか、それによって大きな違いが出るのだから、その子どもの期待に応える努力を怠ってはならない。それができる教師ほど、ペアやグループが可能になるタイミングをいつも探り続け、適切なきに、適切な方法で実施できるようにしていくにちがいない。

先生方に、心からのエールを贈りたい。

「出版記念対談会」で生み出されたものの深さ！

9月4日午前9時半、「出版記念対談会」が始まった。この夏、私が上梓した二つの書の刊行を記念して、東海国語教育を学ぶ会の事務局が開いてくれたものである。

当初、その会は私の講演会にするという提案であった。しかし私はそれを固辞した。講演をしても、それを聴いていただいても、私から一方向の、しかもオンラインでの講演なのだからそこで建設的なものが生まれる可能性はないと思ったからである。

それならと私がお願いしたのは、どなたかと対談させてもらえないかということであった。何の打ち合わせもせず、一切の筋書きのない言葉の往還なら、そこに、思考が生まれ、葛藤が生まれ、共鳴が生まれ、発見が生まれるにちがいないと思ったからである。

それは、私にとって怖いことだった。何が出されるかわからないのだし、出された事柄によって自分が壊れていくことだってあるのだから。けれども、そうなったとしても、それが自分の実像なのだし、壊れることによって気づくこともある、もちろんそれは聴いていただいている方々にとっても得難いものになるにちがいない、私はその魅力を望んだのだ。

事務局の杉前さんが持ち前の企画力と交渉力を発揮して決めてくれた対談相手の顔ぶれを前に私は身震いした。この方々を前に対談・対話をすれば自分が丸裸になってしまう、自らの人間性も素養の無さも。若い頃の私なら、それはとてもできることではなかった。でも、この年齢になると、もう虚勢を張ることはないし、自らの貧しさも小ささもそれが自分だと納得できるだろう。こうして私は、自分でも不思議なほどの自然体でそのときを迎えたのだ。

対談はゲストと私の二人で行う。しかし、ゲストは5人。時間は2時間半。つまり、その2時間半、私はずっと席に着き、次々と私の前の席に着いていただくゲストの方をお迎えする（とは言ってもオンラインなので、現実には私もゲストもそれぞれのPCに向き合っているのだが）ということになったのだ。

こうして、私は、とにかく相手の方の言葉にひたすら耳を傾け、自らの内に生まれるものと切り結び、自らの言葉を紡ぐこととなった。今考えると、その時の私の頭の中にはいくつもの糸がからまるように存在していて、私はその中を彷徨っているような状態だったのかもしれない。けれども、それは、苦痛なものではなく、自分の中の何かが開かれていくような感覚だった。

5人のゲストは、それぞれに異なるものを私の前に開いてくださった。「子どもの事実をみるということ」「子どものもつ多面性」「子どもの思考と心(スピリチュアル)」「祈りとは」「継承とは」「対話とは」、それらを通じて「石井はなぜ書いたのか」というように。

それらの問いを受けるたびに、私は、常に、自らの心に問わなければならなかった。それは、自らの内に生まれた事実の思い出しであったり、それらの事実と事実のつなぎであったり、事実が存在していた意味の探究であったりした。

私は、このように次々と突きつけられるものに夢中になり、そして身を委ねた。そのうちに、今、自分は大変なことをしているという畏れのようなものが感じられてきた。その感覚は、次第に大きくなり、それとともに、今生まれているものを言葉に表す難しさに直面した。

私の中に生まれてきた畏れ、それは、今、自分が語らなければいけないのは、問われたことに対する説明ではなく、「自分がどう生きるか」だということがわかってきたからであった。

考えてみれば、私が2冊もの本を一気に書いたのには、直接的な契機になることがあったからであり、今、書かねばならないと感じた必然性もあったからだが、それよりも、そこに存在していたのは「私が私としてどう生きるのか」ということだった、私はそう気づいたのだ。そのとき、私は、なぜ書いたのかという理屈などないと思った。私が言うのはおこがましいが、私にとって「書くことは生きること」だったのだから。

そう感じ始めたとき、私のはっきり気づいたことがある。それは、5人の方から出されたことが、2時間半を通じて脈絡をつくり、一筋の流れとしてつながってきただけというところだった。それは、今回おいでいただいたゲストの方が、ご自分の対談だけという目線ではなく、対談会全体で、そこで生まれるものに心をはたらかせ、その方々も、私と同じように、いえ、私以上に、ご自分と向き合い、思索を続けておられたということを表していた。

こうして私の心に、5人の方との言葉の往還によって出された事柄が、どれほど深いものであったかが迫ってくることとなった。

- ・ 私にとって、子どもが「みえる」ということはどういうことだったのか
- ・ 自分は、いくつもの面をもつ子ども一人ひとりをどこまで「みて」きたのか
- ・ スピリチュアルのところまで私の「まなざし」は向けられていたのか
- ・ 私が「次の世代につなぎたい」と思っていることは何なのか、それは「継承」なのか
- ・ 私はなぜ「祈り」と書いたのか、この混迷の時代における「祈り」とは何なのか
- ・ 「祈る」ということと私が述べた「つなぎ」とはどう結びついているのか
- ・ 2冊の書の軸になっているのは「対話」だが、究極の「対話」とは人にとってどういうものだろうか
- ・ 結局、私はどう生きてきたのか、そしてこれからどう生きるのか

対談の中で、子どもは「対話」の名手だという指摘があった。もちろんそれはいつでもどこでもそうなるということではない。けれども、確かに、子どもによって驚くような「対話」がなされることがある。だから私は子どもに魅了されてきたのだ。子どもの内に生まれるものを「みたい」と思い続けてきたのだ。そして、その「みえた」ことを書きたいと思ったのだ。

すべての原点は子どもなのだ。私は子どもに生かされてきたのだ。私が「つなぎたい」と思ったことは、子どもの内に生まれる事実であり、それを「みる」目線をもち磨くことだったのだ。私は、それがどんなに魅力あふれるものかということを経験した。だから、私は「書いた」のだ。今が「書けるうち」であったし、「書かなければいけないとき」でもあったから。

そう考えると、私のこの思いに「継承」という言葉はそぐわない。上から目線だと受け取られかねない「継承」ではなく、「つなぐ」という言葉でなければ言い表すことはできないのだ。私は、私が魅了された子どものこと、子どもの世界を記し、その「目線」をつなぎたかった、それだけだったように思う。

この「出版記念対談会」をつくってくれたのは、会の仲間たちである。考えてみれば、会が生まれてから45年近く経つ。それはそれだけの間、私の周りに人がいたということを表している。私は、私と「つながる」ことを願ってくれる人に囲まれていたのだ。180人を超える人たちに聴いていただいた今回の記念会はその象徴だったのではないだろうか。「つながり」を願い、祈る私にとって、これほどうれしくありがたいことはない。事務局のみんなにも、参加者の皆さんにも、そしてゲストの5人の方々に感謝しなければならない。

第 22 回「授業づくり・学校づくりセミナー」、オンラインで開催！

新型コロナ第五波がこれまでにない勢いで拡大するなか、8月21日～22日に予定していたセミナーを、昨年のように中止することなく、会場への参加を見送った完全オンラインで開催した。それでも参加申し込み数が300名を超え、私たちとしては初めてこれだけの規模のZOOMによる研究会を行うこととなった。

完全オンラインで実施するかどうか正直言ってかなり悩んだ。これまで何回か行ってきたオンライン月例会において、どのようにすれば実施できるのかというノウハウはつかんでいた。しかし、300人もの方々を一つのZOOMでつなぎ、トラブルなく完遂することができるのか、グループ協議はできるとしてもそこで出された参加者の考えを交流することは不可能ではないか、それよりも、そもそも私たちのセミナーの命とも言える具体的な授業映像が脆弱なものになるに違いない、それでも実施する意味があるのか、そう考えたからである。

しかし、熟慮の末、そういうデメリットはあるけれど、できる限りの手立てをとって開催することに決めた。それは、コロナパンデミックで疲弊し、思うように授業づくりに取り組めず苦しんでいる皆さんにとって、そういう状況だからこそ開催することに意味があるのではないかと、セミナーの空気に触れることによって活力を得てもらえるのではないかと、講師の先生方と出会っていただくことによってエネルギーを生みだしてもらえないかと、そう思ったからだった。

セミナーを始めて一つ目のプログラムが終わった直後だった。会議場に詰めていた事務局員はたった5人だったのだが、その5人全員の表情が輝いているのだ。他の事務局員からも「実施してよかった！」というメールも飛び込んできた。2年ぶりのセミナーは、私たちの心を一瞬にして満たしてくれたのだ。実施後、いただいた何人もの方々の感想にも、そういう興奮と喜びがあふれていた。セミナーは皆さんに待っていただいていたのだ、私はそんな感慨に浸った。

こうして、2日目、最後の佐藤学先生の講演が終わった午後5時前、すべてをトラブルなく実施できた安堵感と喜びが湧き上がった。やっぱりセミナーはいい！ほんとに実施してよかった！2日間の疲れに身を委ねながら、浮かんできたのは事務局の1人ひとりへの感謝であり、参加して下さった皆さんへの感謝であり、実践を発表してくれた方々への感謝だった。

特に、コロナ禍で、学校の授業研究、現職教育に十分なエネルギーがかけられない中、今回のセミナーで発表していただいた方々は貴重な実践をされていた。そして、それらの先生方は、セミナーの発表に向けて周回準備をさせていただいていた。だから参加していただいた全国の先生方にとって大きな刺激になった。それらの実践は、必ずあちこちの学校の実践につながっていくだろう。心からの敬意を表したい。

そして、そうした実践報告に対して、2日間にわたってあらゆる場面でコメントをいただいた講師の先生方、本当にありがとうございました。先生方の存在はセミナーにとって大きな魅力である。感謝を申し上げたい。

とは言っても、やはり残念なことがいくつかあった。

まず、予想されたこととはいえ、授業映像の不鮮明さ、音声の聞き取りにくさで参加された皆さんに迷惑をかけた。そうなることは分かっていた。だから、せめてもと、字幕を入れ、授業の逐語録を事前に送るなどの手立てはとったのだが、それでもこのデメリットをカバーすることはできなかった。

そもそも映像の撮影に当たって音声をクリアにする手立てをとるべきだというご意見もあったが、私たちが

セミナー報告の俎上に上げる授業は、実施済のいくつもの授業の中から選ぶことにしている。私たちの考える授業は特別なセレモニーではなく、子どもたちの学びにつながる飾りや誇張のない日常的なものでなければならないという思いがあるからである。だから、何かの発表会を万全の録音録画技術で収録するというような方法はとっていない。そのようにしてしまうと、授業が発表のためのものになってしまう危険性があるからである。そういう意味では、この問題は、オンラインで行う限り、避けては通れないことだということになる。やはり、会場におけるセミナーに勝るものはないのだ。来年度、皆さんとともに会場において、じっくりと視聴できるように願っている。

ZOOMには「チャット」という機能がある。オンラインで視聴している参加者に質問や意見があれば、文字で伝えることができるというものである。その「チャット」で意見を発信された方が何人かいらっしやった。しかし、そのご意見をプログラムの進行に生かすことはできなかった。それぞれのプログラムを進行している司会者は1人である。だれかが横にいて、どういうチャットが来ているかをそっと知らせたりすれば、プログラムの進行に生かすことができるかもしれないのだが、コロナ禍で1人で画面に向かって司会をしている、しかも初めてのことで、そういう状態で突然送られてきた意見を協議内容に組み込んでいくことはとても難しいことだった。ご意見には「無視」と書いてあったけれど、決して意図的にそうしたわけではない。どうかご容赦いただきたい。

事務局としてもっとも驚いたのは、発表者の発表時には、たとえば300人近くだった参加人数が、ブレイクアウトルームによるグループ協議になると、250人以下になるという現象が起きたことである。土日における開催、参加者の皆さんのほとんどが自宅でコンピュータに向かっておられる、自宅にいれば、ふっと何かに気づいて中座したくなる、そういう時、中座するならグループのうちにと考え、案外簡単に席を立つことになるのではないだろうか。オンラインである限り、それを止めることはできない。仕方がないことかもしれない。

ただ、一つだけわかっていただきたいことがある。グループで聴き合うということに関しては、セミナーにおいても子どもたちの授業においても、その値打ちに変わりはないということである。私たちは、「学び合う学び」の授業において、グループの学びは全体の学び以上に大切なものだと考え、子どもたちにグループの学びを大切にするように指導している。他者の考えを受けとめ、自分の考えを語り、考えと考えを擦り合わせる協議は、私たち自身の学びを生みだし深めるからである。そういう意味で、ブレイクアウトルームにおける協議も、講師の講演やコメントを聴くのと同じくらいとても大切なものだと考えなければならないのではないだろうか。

ところで、ZOOMを操作していたのが1人の事務局員だったということを皆さんはご存じだろうか。彼には、受付を始めた1か月前から、大きな負担をかけてきた。そして、セミナー当日は、操作にかかりきりになった。そして、参加費を払っているにもかかわらず、彼には内容的な学びが不十分にしかできなかった。これはオンライン研究会だから生じたことである。もし、今後、再びオンラインで行うことになったら、今度は、外部委託するとかという方法をとらなければならないと反省している。

行き届かなかったことはまだまだいくつもあったことと思う。そういったところを問題にせずご参加いただいた全国34都道府県からの参加者の皆さんに、心からお礼を申し上げたい。来年度8月1日(月)～2日(火)にお会いできること楽しみにしている。2日間ありがとうございました。